



すべてのおひとりさまへ

少し前まで、「オールドミス」というコトバがありました。

「三十振り袖」も「いかず後家」も、「負け犬」だって、ありました。

「未亡人」や「バツイチ」だって、いやなコトバです。結婚からはみだした女は、はんばもの扱いでした。

結婚がスタンダードだった時代は、終わりました。結婚や家族がキライなわけじゃありません。それも人生のひとつのこと。よい結婚ならしてもいい。でも、いずれ、結婚してもしなくても、最後はひとりであることを、わたしたちは知っています。

いまや「おひとりさま」の時代。差別も同情も、どちらもたくさんです。

おひとりさまの空間には、だれに遠慮もいりません。おひとりさまの時間には、だれの許可もいりません。おひとりさまの暮らしには、だれの顔色を見る必要もありません。

だからといっておひとりさまは、孤立しているわけではありません。

ゆたかな仲間とテイスト、ほどほどの気概と備え、そして寛大さと前向きの気分さえあれば、安心して「おひとりさま」でやっていきます。

これは、そんなあなたへ贈る「おひとりさまでOK!」マガジンです。

上野千鶴子 (責任編集)



h.y



GLOVES: For information 03 3661 5511 www.benetton.co.jp

UNITED COLORS OF BENETTON.

UNITED COLORS OF BENETTON.

Opinion

リレーおぴにおん

建て替え経て、尽きぬ愛着

女優としては珍しいかも知れませんが、人生70年、ずっとマンション暮らしです。しかも同じ場所。

強がりではなく、一戸建てに住もうと思つたことがなかった。広いと手間がかかるし、不用心でしょう。朝が弱いから都心じゃないと困るし、何より朝のゴミ出しがイヤ。

両親も同じ考えだったようです。私が生まれる前までは、大阪の郊外にある大きな一軒家に住んでいたのですが、駅からは距離があるし、庭もあるからメンテナンスが大変。番犬を飼って、お手伝いさんも雇って、何かと煩わしかったみたい。父が仕事で東京に出てきたとき、「鍵一つで外出できる」と感動して飛びついたので、1934年にできたばかりの同潤会江戸川アパートメント(現・東京都新宿区)でした。

マンションに住まう①



—東京都千代田区、福岡亜純撮影

生まれたときから住み続ける女優

坪内 ミキ子さん (70)

リット造りの集合住宅を首都圏に広めたことで知られています。江戸川アパートは4階と6階建ての2棟で約260戸。集中暖房システムや社交室を備えたモダンな建物は当時、「東洋一」と呼ばれ、特に文化人の人気を集めました。

も、夕方にはブランコのある児童公園に集まり、缶けりや鬼ごっこをして日が暮れるまで遊んだ。結婚して、長男が生まれても出ていかなかった一番の理由は、仕事を続けるのに母の助けが必要だったから。同じ建物の別の部屋に住み、母の部屋に近づくために3回も引っ越ししました。もう一つは、人間関係の魅力です。生まれたときから知っていた幼なじみや近所の人に囲まれている気安さと、必要以上に踏み込まれない節度。安心とプライバシーのちよつと良い兼ね合いがあった。それでも年を重ねるごとに、不便さは募りました。ほとんどの部屋にお風呂がなく、共同浴場があるような建物ですから、近代的なマンションとはほど遠かった。電力は15瓦。リビングもない。とても人は呼べなくて、「お宅拝見」番組は断り、来客があったら近くのホテルで応対するようにしていました。

Opinion

リレーおぴにおん

シングル女性こそ購入を

初めてマンションを買ったのは、大学に職を得て、定期収入が得られるようになった30歳すぎのころです。家賃とそう変わらない月々の支払いで手に入ると知り、夜行性のシングルにも暮らしやすい京都市左京区に2LDKを買いました。以来、住み替えを重ね、買ったマンションだけで5部屋に上ります。

私にとって住まいはツール。生活が仕事中心なので、職場に近いことが一番の条件です。東大の徒歩圏には、望む広さのマンションがなかったの、いまは3階建ての一戸建てに住んでいます。メンテナンスは面倒くさいし、階段はつらいし、宅配も受け取れない。何より、部屋を暖めて待つてくれる人がいないシングルには、冬の寒さか思った以上にこたえました。

仕事を休んで、夜中に帰ってくるシングル女性にとって、戸建ては厳禁ですね。近々またマンションに

マンションに住まう②



—東京都文京区、高波淳撮影

「おひとりさま」のカリスマ 東京大大学院教授

上野 千鶴子さん (62)

引越すつもりです。「なんで借りないの」とよく聞かれますが、だつて買えば資産形成ができる。何十年も働いて、自分のスペースが残るか残らないか、その違いは大きい。経済力がなく、ローンを組みない女性には「住宅弱者」とされてきまし

場所を確保することは、シングル女性にとってもものすごく重要です。3年前に出した「おひとりさまの老後」という本の取材で感じたのですが、施設に入ったお年寄りが「家に帰りたい」と言つとき、その意味するところは「家族のもとに帰りたい」ではなく、自分の安らげる空間、つまり「箱」としての家に帰りたいというところなのです。人にとって住まいはセキュリティの基本。それだけ大切なんです。昔と違って、いまはマンションを買う女性が増えている。理由はいろいろあります。まず経済力のある女性が増えたこと。次に、人生を「結婚までの待機の間」ととらえる女性が減り、買った後が「結婚しない人」と思ふことで、声をかけてくれなくなるというシニクスもなくなつた。中古市場の発達で、住み替えが定着したのも要因でしょう。新築神話が弱まり、首都圏でもマンシ

ョンが手の出る価格になってきた。もはや不動産は「一生に一度の買い物」ではなくなりました。だから頭金を用意できて、ローンが組めるのなら、絶対に買うことをお勧めします。その際、重要なのは流動性を意識することです。車をかうときも、のちに中古車市場で売ることが考えれば、奇抜なものを買わないでしよう。住まいも同じ。市場の変動によつて、もうかつたり、損したりはしますが、便利が良くて、個人的すぎない物件なら、売って住み替えることは難しくありません。マンションのデメリットは、資産の劣化が早いことです。だから、子孫に残そうなんて考えなくていい。生きてる間に安心できる住まいが確保できれば、それでいいじゃないですか。「終の住み家」だと思わなければ、清水の舞台から飛び降りる思いをしなくても買えます。

私の理想は、自宅で最期を迎える「在宅ひとり死」。自由に死ぬためにも、自分だけの住まいは欠かせない条件です。(聞き手・松下佳世) <次回は16日に掲載します。>